

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	1	○ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の涵養
目標（評価基準）		① 授業規律を守り、粘り強く学習に取り組んでいる。 ② 自分の考えをもち、他者との対話を通して考えを深めている。 ③ 「見通し」をもって授業に臨み、単元終了後などで「振り返り」を行っている。 ④ 家庭での学習に自ら取り組んでいる。
重点に係る現状 設定理由		今年度全面実施となる学習指導要領の「確かな学力の育成」を踏まえ、学習に対する目標を明確化・具体化し、その意義を踏まえながら向上心をもって粘り強く取り組む生徒の育成を家庭との連携のもとでめざしたい

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	①「授業規律を確立し、段階を踏まえた学習の流れを構想することで、生徒が粘り強く取り組むことができるようにしているか」という設問については、95.2%の教職員が肯定的な回答であった。 ②「単元等の中に、対話的な学習の機会を設けているか」という設問については、85.7%の教職員が肯定的な回答であった。コロナ禍でもあり、対話をとした学習を設定しづらいところもあったが、工夫しながら取り組んでいる様子があった。 ③「単元等の学習のまとめごとにねらいと見通しを示し、振り返りを行わせ適切に評価しているか」という設問については、76.1%の教職員が肯定的な回答であった。 ④「家庭学習の仕方を指導し、適切な学習課題を出しているか」という設問では、52.3%の教職員が肯定的な回答であり、課題が残った。
各アンケート等の結果	①「授業に意欲的に取り組む」ことについては、88.7%の生徒が肯定的な回答であり、84.2%の保護者が自分の子どもを見ていて肯定的な回答であった。 ②「周りの生徒と話し合う活動とおして自分の考えを深めたり広げたりすることについては、84.2%の生徒が肯定的な回答であり、79.9%の保護者が自分の子どもを見ていて肯定的な回答であった。 ③「生徒が意欲的に学習に取り組むことができるよう、見通しと振り返りを行う」ことについては、70.6%の生徒が肯定的な回答であり、70.5%の保護者が肯定的な回答であった。 ④「家で自ら学習に取り組む」ことについては、70.6%の生徒が肯定的な回答であり、家庭での様子を見て「自分から学習に取り組んでいると思う」ことについては、60.4%の保護者が肯定的な回答であった。
自己評価結果 (見解と改善方策)	①「学習態度」の項目については、生徒・教職員ともに9割近い肯定的な回答であるが、保護者は、学校での様子を見る機会がないため、やや低い回答となっている。保護者の回答の経年変化を見ていくと、コロナ禍前と有意な差は感じられないものの、生徒の学習の様子についてより積極的な発信が求められると考える。 ②「対話的な学習」については、コロナ禍の中での授業展開ということもあり、教職員の方も恐る恐る実施をしていた現状があるものの、全国学力・学習状況調査での同設問では、神奈川県平均30.8%よりも有意に高く、生徒の受け止めとしては高い数値を得たものと考えられる。 ③ 新学習指導要領で学習指導の改善の方向性として示されている「見通しと振り返り」について、全体として7割前後の回答であった。教職員の方も意識的にそうした場面を設定しているが、限られた授業時間の中での時間配分に苦労している面は見られる。こうした取組の成果として、保護者の回答は、経年変化で見ると、過去5年間の中では最も高い肯定的な回答となっている。 ④「家庭学習」については、教職員の否定的な回答が大きいところが目立つ。教職員側からは家庭学習として課題を課すことが少ない、とらえているところがあるが、生徒は塾等での宿題などに取り組んでいるところも家庭での学習としてカウントしていることが想定される。また、教職員からは、生徒が提出物等に意識的に取り組む姿勢が高まっている実感があるという回答があった。どのような課題をどのように取り組むのか、ということを含め、家庭学習の仕方を適切に提示していくことは今後も課題として取り組む必要があると考える。
学校関係者評価結果	○ 中学校でしっかりと指導をしていただいている様子があり、小学校としても安心して送り出すことができる。 ○ コロナ禍の状況の中で、「対話的な学習」についてできていると実感をもてているところがすごい。中学校で実現しているから、小学校でもがんばりたい。 ○ 小中学校で目標を共有することでさらに力を伸ばすこともできるのではないかと。授業づくりについて小中で連携を進めていきたい。
最終改善方策	○ 授業づくりに関して、本校の基本的な考え方は、新学習指導要領に基づいており、的確であると考え。今後さらに教職員間で共通理解を深めながら取り組んでいきたい。 ○ 小中学校で授業づくりについての連携が進むことでさらに生徒にとって有意義な学びが展開されることが期待できるので、コロナの状況を踏まえながら、できることを少しずつ進めていきたい。 ○ 家庭学習については、「何を」「どのように」取り組んでいくのか、課題の内容や学習への取り組み方を含めた指導をさらに進めていきたい。

本年度の重点	2	○ 自己肯定感をもち、互いに協働しながら、持続可能な社会の創り手となろうとする生徒の育成
目標（評価規準）		① 自分のよいところに気づき、自己の特性を活かしながら諸活動に取り組んでいる。 ② 人権感覚を身に付け、他人や社会との関わりの中で実践している。 ③ 集団の一員として協力的な言動を取っている。 ④ よりよい学校生活・持続可能な社会を築こうとしている。
重点に係る現状 設定理由		本校における人権教育の取組を継続しながら自己肯定感を育むとともに、多様な他者と協働する様々な集団活動（授業や行事等）を通して、よりよい学校生活や持続可能な社会を築こうとする資質・能力を育成したい

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	①「生徒のよいところを積極的に認め、伝えているか」という設問については、95.2%の教職員が肯定的な回答であり、学校経営方針を理解して取り組んでいることがわかった。 ②「生徒の特性を理解し、学校生活の諸活動に活かそうとする態度の育成について具体的な取り組みをしたか」という設問については、90.4%の教職員が肯定的な回答であった。 ③「集団活動の中で仲間と協力して過ごすための望ましい言動についての指導を工夫したか」という設問については、90.4%の教職員が肯定的な回答であった。 ④「生徒の自治能力の向上に向けて具体的な取組を行ったか」という設問については、66.7%の教職員が肯定的な回答であった。
各アンケート等の結果	①「自分のよいところ」について、64.5%の生徒が肯定的な回答であった。3年生は75.6%(全国学力・学習状況調査では78.1%)であり、全国学力・学習状況調査の神奈川県平均75.8%に比して、ほぼ同等である。学年があがるにつれて自分のよさを認めている傾向が認められる。「子どものよいところを伝えられているか」については、78.4%の保護者が肯定的な回答であった。 ②「自分のよいところを活かそうとする」については、75.5%の生徒が肯定的な回答であり、75.5%の保護者が「よいところを活かそうとしている」と肯定的な回答であった。 ③「仲間と協力して行動する」について、91.7%の生徒が肯定的な回答であった。87.1%の保護者が自分の子どもを見ていて肯定的な回答であった。 ④「学校や地域社会をよくするために考え、行動する」については、61.5%の生徒が、また、59.7%の保護者が肯定的な回答であり、コロナ禍により行事がなかったことや、地域社会と連携した活動ができなかったことが影響していると考えられる。
自己評価結果 (見解と改善方策)	①「自己肯定感」については、生徒の否定的な回答が多く、生徒が自分のよいところを認められていると感じることができない。教職員は自己肯定感を高めることのできるようよいところを積極的に認め、伝えていると考えているが、さらに伝え方を工夫したり、自己有用感を実感できるような活動を意図的に仕組んでいく必要がある。 ②「人権感覚の醸成」については、教職員の意識と生徒・保護者の意識に有意に格差が見られる。これも、コロナ禍により活動の多くが制限されている中でのより工夫が求められると考える。 ③「集団生活の向上」については、全体として肯定的な回答が多く、集団の中で思いやりや責任感をもって仲間と関わろうとする態度が育成できていると考える。 ④「自治能力の向上」については、全体として肯定的な回答が6割前後であり、具体的な行動につなげていくための取組ができていないことが大きく影響していると考えられる。この2年間は、学校公開週間を含め、授業参観など、保護者に生徒ががんばっている姿を生でお見せすることができていない。学校通信は週に1回は発行するようにしていたが、なかなか様子を伝えることができていないのが現状である。学年やクラスで分散しながらでも、保護者に学校に足を運んでいただき、学校の取組を見ていただくような工夫をしていく必要があると考える。
学校関係者評価結果	○ 民生委員会もこのコロナの状況の中でなかなか思うように活動ができず、学校現場の苦勞がよくわかる。 ○ 少子化が進行し、地域にも人がいない状況である。地域の中でも上下関係などを学ぶ機会がなくなってきている。人間関係づくりの場として学校教育がとても重要になっていると感じる。 ○ ②「人権感覚の醸成」に関するアンケートの質問文は、「相手との関係性」という視点が欠けているのではないかと感じる。 ○ 「人権感覚の醸成」「集団生活の向上」「多様性の尊重」に関するアンケート質問文はもう少し精査する必要があると感じる。
最終改善方策	○ 「自己肯定感」「人権感覚」を育むことは大変重要なことであり、今後、あらゆる機会を活かしながら向上させるよう努めていく必要がある。 ○ コロナ禍の状況で行事や集団的な活動ができなかったが、その中でも仲間と協働しようとする生徒の姿が多く見られた。こうした生徒のよさをさらに伸ばしていけるように指導の工夫に努めていきたい。 ○ アンケートの質問内容については、さらに精査を加え、めざしていることが的確になされているのが把握できるように改善を図ることとする。 ○ こうした学校の取組や生徒の学校生活の様子をいかに保護者に伝えていか、に課題が残っている。コロナ禍の中でできる工夫をさらにこらしていく必要があると考える

本年度の重点	3	○ 基本的な生活習慣を定着し、よりよい人間関係を形成しながら、自己実現を図ろうとする生徒の育成
目標 (評価規準)		① 秩序や規律のある生活を送るために、きまりの意義を理解し、礼節をふまえ、時と場に応じた言動をとっている。 ② 暴力や暴言、いじめのない、安心して安全な生活を送っている。 ③ 互いの人格と個性を尊重し、よりよい人間関係を築いている。 ④ 自分のよさを発揮するための主体的な進路選択を通して、自己実現を図ろうとしている。
重点に係る現状 設定理由		睡眠時間をしっかりと確保することや朝ご飯を食べること、SNSの正しい利用などの基本的な生活習慣を基盤としながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在および将来における自己実現を図っていくことができるようにしたい

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	①「きまりの意義を理解させ、生徒が礼節を踏まえ、時と場に応じた言動が取れるよう指導しているか」という設問については、90.4%の教職員が肯定的な回答であった。 ②「暴力暴言・いじめ・からかいが許されない環境をつくっているか」という設問については、100%の教職員が肯定的な回答であった。 ③「生徒が仲間のよさに気づける機会を積極的につくったか」という設問については、85.7%の教職員が肯定的な回答であった。 ④「将来の生き方を見据えながら、情報収集や学習に意欲的に取り組む態度の育成について成果はあがったか」という設問については、71.4%の教職員が肯定的な回答であった。
各アンケート等の結果	①「きまりを守り、時と場合に応じた礼儀正しい言動」の項目について、92.1%の生徒が肯定的な回答であり、93.5%の保護者が自分の子どもを見て当てはまると回答している。 ②「暴力暴言・いじめ・からかいを許さない環境」の項目について、87.9%の生徒が肯定的な回答であり、76.3%の保護者が学校の取組を肯定的にとらえている。 ③「よりよい人間関係・多様性の尊重」の項目について、92.1%の生徒が肯定的な回答であり、83.5%の保護者が自分の子どもを見て当てはまると回答している。 ④「進路学習や職業学習に対する意欲的な取組」の項目について、80.8%の生徒が肯定的な回答であり、61.9%の保護者が自分の子どもを見て当てはまると回答している。
自己評価結果 (見解と改善方策)	①「規律・礼儀・あいさつ」については、生徒・保護者・教職員のいずれも9割を超える肯定的な回答であり、本校において落ち着いて学習や生活を送ることができている状況を示していると考えられる。毎朝の登校指導で、全校生徒の顔を見て声かけてきていることが、メンタル面や生活指導面ともに早期発見と早期解決につながっていると考える。否定的な回答を寄せている生徒へのより丁寧な支援・指導・関わりが必要である。 ②「安心・安全な生活」については、生徒・教職員の肯定的な回答が高い。「指導」の前に「丁寧な支援」ができていないために、暴力暴言がここ数年で激減している。また、教職員への信頼感が高いことも感じている。「生活アンケート」を毎週実施し、生徒がSOSを出す場が確保されており、安心感につながっていると考えられる。また、職員室内のホワイトボードや指導メモの閲覧等、指導に関する一貫性を生み出すための情報共有が細かくなされている成果でもあると考える。これに比して保護者の肯定的な回答が低い。コロナ禍であり、学校の状況を直接見ていただく機会がなかったことや、学校からの発信に課題があると考える。 ③「多様性の尊重」については、コロナ禍による影響で仲間のよさを実感できる行事が減ってしまった状況ではあったが、生徒の肯定的な回答が9割を超えており、学年・学級における授業中の中で仲間のよさを見いだし、よりよい人間関係を構築しようとしていることが感じられる。また、インクルーシブ教育を念頭に置いた「支援の体制づくり」に力をいれたこともあり、周りの生徒が自ら支援を求めている生徒へフォローする姿も多く見られた。保護者・教職員の肯定的な回答は8割を超えているが、「よく当てはまる」と回答する割合が少なく、行事が実施できないことへのいらだちに似た気持ちを感じる。毎日の学級指導の中では「今日のキラキラさん(一日の中でがんばっていた人)」の紹介に取り組んでおり、今後さらに普段の生活の充実を意識的に図っていきたい。 ④「進路選択」については、コロナ禍により職場体験が実施できなかったことが大きく影響している点は否めない。調べ学習とはなるが、職業学習や進路学習には取り組んでいることもあり、生徒の肯定的な回答は8割を超えているが、保護者・教職員の回答は7割を割り込んでおり、今後もこの状況が続くことを踏まえ、より工夫を凝らした指導が必要であると考えられる。
学校関係者評価結果	○ 子どもの送迎で来校する機会があるが、そのたびに生徒のあいさつのよさに感心をしている。安心して学校に預けることができている。 ○ 一番大切なことは、「大人が生徒の見本となる姿を見せること」だと思う。まず大人が変わっていかねば対応することのできない難しい時代に入っている。そのためにも、先生方には肩の力を抜いて、思い切り取り組んでいただくことを期待している。
最終改善方策	○ 秩序や規律のある生活を送るための基本的な礼儀や礼節を踏まえた言動ができおり、今後も引き続き、教職員と生徒・保護者との温かい信頼関係のもとで指導・支援することが大切である。指導に関する一貫性を生み出すための情報共有の仕方を工夫しながら、教職員が一丸となって、何気ない普段の生活を充実させる指導に当たっていききたい。 ○ 自己実現を図るための主体的な進路選択に資する職場体験等の学びがコロナ禍においてできない状況が続いている。机上での学習だけではなく、生徒が自ら体感できる機会をどのように提供できるのか、工夫をしていきたい。